

027  
396  
1

柳千句

截後加茂



029  
396  
1

交知女專  
第 11574 號  
書 圖

6511  
11574  
291



柳十白序

け國よは或とむしけけよちち麿る序の  
あし白とくくあくとくあしそのた  
けああのみりてあしよひてそく  
いつても奉細の挿紙のりやふた

空を飛ぶ鳥も難をこししとせし余半と  
しつゝ月しおちちる金船の船返し  
柳ふくくとさひまうとと海と道の  
ちやんとさししふらとさるれとと  
しけりくはしるのさるふく  
ちの別者よまうとふく

初より通れおれとさるしと文意の  
つみめとあけ鳥とあまうとと連言  
るよれ声とさるしとわの梅の香し  
とさるしとわしとさるしとさるれ  
御留のしとと通れおれとさるしと  
柳のさるしとさるしとさるしと

かゝりて約しあはく  
物たり

西永巳亥孟春日

五秋庵

菊文



十一

菊の落し道程の及し柳ふ

菊文

庭実より露を心き花はく

竹葉

月夜く新く露を心き花はく

逸洞

降ぬるるの風を心き

玉枝

禱くし水も湖のの礫のい 自適

花うたうてゆえんふうと藤 花は

振ひも月の月さうと草えうと 芥魯

おねあふくやうたはれむ地 宗吉

去二

二二

海風の吹も昔よせぬ柳うら 里島

西もほゆる川もなれむ能 希岸

ほれあふ節々のさあはやくうく 辰隆

山もちもさきあふさる 吉鳥

おなれれあふもけの二はく 系花

月あふんふうよまわかのこま 風好

かり月よおきよのほろよまよまよ

夕街

そし物よよまよまよまよまよ

均厚

其二

あふれよふれや宇治の柳うけ

浦の

あけ冷くかく枝ねまよまよ 竹並

澄しけとさぬくぐうまよれのまて

完二

あふれまよりの苗よけうり

葉巻

あふれまよ新町まよけまよあひ

柳岡

あふれまよ船まよまよあふれ

里人

月約まよまよまよまよまよ

水街

あふれまよまよまよまよまよ

磨子

賑り辭目少も物も抑りぬ

平政

徳も平の例より下りぬる

竹葉

心ゆく都のささりの空さく

元貞

又さくやまを物とせぬり

初辰

建おそるは他より非るは

彦良

者くさるもさくさく

宇泉

僧より旅味をさくさく

其家

信よりぬくも神高れ詮

旧境

最久の泥田より新柳

紋紙

兼是の事と若山燕 井原

中々の定二酒はあつたく 飯泉

初五しては柳花 一川

片入致し月ありふく 柳明

草花久しくやふ 兼元

行はれくふ七緒上目の歌 宣徳

まよふしりし 若山燕

書六

小河

むしきも路よりく柳花

ふくはし 長き 春の跡 竹葉



ふれりん 飛南七 五のふて 和泉

暖心屋の内此 五のふて 白雲

丁西の 五のふて 山 納 乃之

禪の 五のふて 五のふて 魚

あゝ 五のふて 五のふて 五のふて 龍風

あり 五のふて 五のふて 五のふて 五のふて

五七

ほ 五のふて 五のふて 五のふて 可保

五のふて 五のふて 五のふて 五のふて 五のふて

五のふて 五のふて 五のふて 五のふて 五のふて

五のふて 五のふて 五のふて 五のふて 五のふて

田子川も塵の川に  
 流るる家のりりり  
 草花はよみよみ  
 花の目めり  
 春白

廿八

柳のえ入まじき一健  
 望のりよあし  
 柳 玉雨  
 竹葉  
 文新  
 柳をよむ川に  
 流るる家  
 海谷  
 花の目めり  
 春白  
 八朔もよみよみ  
 柳白

新張れ茶をくくふ蒼とら

夏松

あさひの流あはるの勢也

冬原

廿九

柳ふえよろねね照る曇

指山

夏草——正山の石

赤岩

冬上よふ鳥七角とくろけ

程君

あをとりあひるき隔あり

百中

波濤北津を流してもとせぬ

石奥

ひよこ青く指あふる

渭江

月け七峰の舟に月あり

路岐

雪の重く僕くは帷子の旅

正後

其十

折よれし柳やまはれしはる

鳥名

多しをゆしそふ折し鳥

竹葉

籬の目も憐れしきれは伊達あり

里心

こんふそ信しんよるすれ

菊枝

お座し大朝の鳴れの時後七

菊毫

論強のりし川し海平

有月

冷けりもさぶらん月の夜

葉之

秋よ寂しきもよる上京

曉成

餘息

下ふりしふはくはとくし先  
月ふれ連年と振る候し  
子白内尾とわい金銀とをこれ  
所礼と云ふらんしあし

六六

法ふまれば布をや梅しふらふ  
ふりれは喜しと云ふは希  
代とわく馬やうぬしいふれく  
禱ふらんやうふらふとあし  
買櫛ふあつてはすぬえんは  
新の法ふらんしあし

赤草

鳥羽

菓文

う保

お保

孫山

月をくわく一問に障まふけし

里新

律のまふをむねし合点

文部

右百納下巻

